

北海道札幌博物館

八田三郎殿

親展



圖

兵庫縣芦屋山王

鳥居赫雄

ありて三山遠行し保に親を伴ひて平一連の道を行く程下  
 ち何とて目下果行懸望中にして身内は完行可仕、名  
 野古城と地獄一帯、大兄命は先部記入可仕、然  
 に茲に女外なるお初有之、中上くこまか中山す、大  
 に諸者侍り、實は多年一考へるべき事にて人々の目よてお控へ  
 たりしかし生死不測、近頃晩鐘頻りに響く、依  
 思坤つて表をせぬ、即ち別子中、後之先身  
 勝者出共、いと親類は扱の文治と改、口を頻り  
 に大塩平八郎の書を採り少くも、外に少くも或る年一、大塩奉と  
 改、いと古城古来の御持、大塩の御を借り来り、大  
 改、いと親し且縁業をさし御製侍り、其際古城曰く此の  
 家は由緒あり、家より出たより、いと自らは大い、いと古

上の  
 とう文運（上）何れにもあつたといふ  
 持て行くやこのまゝでいふと大坂  
 に持帰り其のまに路一い古城はを備をよる所戻す言ふは  
 免之、いふ共（たつ持り也）而していふは何時にも古城に返す  
 意なきが、勝本三が持りに大坂を掃かせし時、今を去り  
 て思ふよふもいひ持りかを贈りて、其の終は由緒あり、字を  
 出たてものいふを友人のあつたせりまつし、かしこいといふ（勝本）  
 とは別人がその關係、其の家にいづくもいふの終持すよ同様也  
 之を用立つていふ贈りか、字は花着水流の四つなりし  
 かとあつた、いふと勝本三この關係今いふ如くはとては夢にも  
 思ひつゝ、永久に親類交際を改めて、昔時向その親類  
 に感一衣たる除せよは其の類に限らず、いふは随分かといふに  
 此一の記念にといふも贈り、を市するも赤心を盡くして行  
 々贈りよす、いふかたに人生の曲（曲）送（送）何ぞ深融おす、いふと

峠山

一は種々大見にやせしやせも多し、又同業にたかぬ事ども  
 絶へざる事に入り、名、隨分奇怪の事、有るに大見は  
 勝者として縁戚の事、有るに一切の事は口を咄み、  
 二、妻が状態、おもしろ、大見と、さうの文、理も、今、  
 三、を、え、し、も、天、の、人、を、并、し、甚、ど、甚、し、さ、や、に、  
 四、林、に、跡、を、有、る、一、直、に、跡、一、二、三、遊、迹、は、い、る、  
 五、種、二、合、成、の、種、を、一、と、有、る、の、か、一、切、の、事、の、消、息、を、  
 六、し、巴、里、備、前、に、も、に、有、り、と、事、お、り、い、い、ぶ、ラ、ン、ト、も、  
 七、甚、に、強、い、に、有、り、い、い、か、他、の、事、は、何、う、で、も、  
 八、に、有、り、と、は、古、城、に、對、し、は、み、や、し、古、城、は、一、切、の、  
 九、に、古、城、も、事、お、り、一、切、古、城、が、地、を、有、り、し、と、  
 十、か、又、小、さ、が、古、城、を、考、へ、し、と、い、う、事、の、  
 十一、事、の、代、り、と、事、に、由、來、に、あ、る、  
 十二、

はん、句傳古本たほつとゞる色この其幅さ短り、古本ゆきに、  
言ひ、吾一毎毎世ははかりと挨拶する位にて、其類の返還は  
ホもく言はえ之、唯少ながるぬとぞあまじ也、筋末もも時こ  
林には面々のより、ラはる一四林は右の依と致しぬ、林は右  
し誤解まはつたぬかとい言はぬが好しとらん、依つとも致  
合せ、いかに古本ゆてあを有りの性質、小も古本に有せ  
り性傳は有え、折ゆけり、故の古本ぬと、こ小丈心苦しく、この子か  
小ものへあつた、るにやを、人とし不可測、依のま、いこも返還は  
悔の事もあつて、者一大兄の致は、い何とか好工夫もあつた、と数  
お暇是れと考へぬ結果、思却つて此の書面を右上げ、い決し  
し、  
に同巻を返還しつとるか、或は大兄の書を短し古本にき、下  
さつか、あまじ仕、唯自らを盡くし、  
一は明は他口にあ

分止

16

年 月 日

此の如く、一考、右に返還の事にあつても、一考、右に返還の事にあつても、  
 才の量り、大雅堂の才幅を返還する所、大足も定めて、  
 送還の事とあり、決して心酌は入らず、成石も、  
 面影がくさり、越下、小、不、一切、返、事、可、く、  
 小とは一考、思、功、つ、大、足、に、キ、  
 也、あ、  
 十月廿二日、  
 林、  
 生、

11回と一考也